

〒745-0034 周南市御幸通2丁目22
 防長本社 Eメール bocho@chugoku-np.co.jp
 中国新聞山口 Eメール chugoku@c-spice.co.jp
 情報サービス URL http://www.c-spice.co.jp
 ☎0834(33)5605 FAX0834(33)5610

ホット通信

教育・文化

この前、ある中学校の生徒たちと触れ合う機会があった。聞くところによると僕の母国スリランカと交流が盛んだとか。文房具を送る支援もしているらしい。実にありがたいことである。

ふと素朴な疑問を生徒にぶつけた。「スリランカからも何かを得たというか、学べる

以んたのやまぐち日記

14

ことが一つでもありましたか」。みんなぼかんとしていた。先進国日本がスリランカに与えることがあっても、逆はないという発想がそこにあった。これは子どもたちの責任というより、大人の入れ知恵がそうさせているような気がして寂しかった。

似たような状況が先日の僕

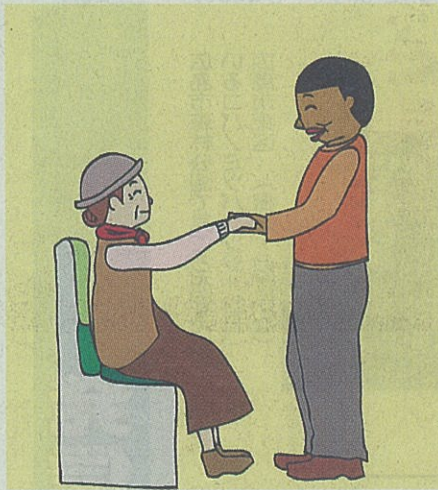
心豊かな母国では不要

シルバーシート

の大学の教室でも起きた。「スラッシュアワー的な感じである。スリランカにはシルバーシート。」「どんだけ乗せるねん」がないんだよ」と言う学生と、突つ込みたくなるほど人が驚いた。ついでにその状況を話め込む。

を「どう思う」と尋ねた。数 先日久しぶりに帰国してバ人が「日本のシルバーシートに乗った。こんでいなかっを教えてあげたい」と口をそ たので、席が確保できた。窓ろえた。だが、僕にはその答 からポーッと外を眺めているえは少し違うように思えた。 と、ぼーんとひざの上に重いスリランカの乗り物事情は ものが載せられた。びっくり実に面白い。乗り合いバスな して目をやるとなんと人の靴どはほとんど日本からの中古 ではないか。目を合わせた彼車です。「〇〇温泉」「〇〇 は僕に微笑むだけで「お願い

「お願ひ」など書いたバスを見か します」もなにもない。ける。一瞬自分がどこにいる 実は一つの荷物にとどまるのかと頭が混乱してしまう。 ことなく、気がついたら、あ車の混雑具合もすごい。常に つという間に三人もの荷物が



イラスト・石井彩子

僕のはひざの上にドッシリと。スリランカでは、バスなどで立った人は、座っている人に荷物を預かってもらうのが常識なのです。それが、お礼を言ったりするほどでもなく、ごくごく自然の事柄です。

それだけではない。僕が買って読み終えた新聞を前の座席の人が断りもなく、手に取って読んでいた。そこにはイヤホンの音楽などで自分の世界に陶醉している日本の乗り物風景と違って、目の前の人間関係性を大事にする、温もりあふれる世界が展開されていた。

でも、何より言いたいのは、途中で乗って来たおばあさんにみんなが席を譲りあげたことである。そうした行為はこの国では美学であることを思い出させてくれた。シルバーシートとわざわざ指定しなくても、席を必要とする人がいたら譲ることが当たり前という価値観である。

日本でも昔はなかったシルバーシートが日常のごくありふれた光景になった。それは日本が進んだ国になった証しでないことは確かだ。

(県立天國際文化学部助教授 J.A.T.T.D.にしゃんた)

- 中に居る 松本 清江
- 古希すぎのおとこは気取らず冬シャツ 吉村 勝義
- 花芽はふけど計報つづきの雨日和 小田美津子
- 夜明けの金メダル幸せな一日 小藤 淳子
- 振り返るとワインドウガラスに母がいた 善弘ヨシエ
- 袖も通さずに主は逝ったのか古着買っ 仁科 恭平
- 知らぬ人から声かけられ知られているらし 小野恵美子
- 手にすくえるようなこれを春風 丹生谷劍多利
- 高層ビルに鳩一羽なを 見てなと思う 満崎 えみ
- 床上げ萎えた脚陽に晒す 木本千鶴子
- つわぶきのきいろい花は恋かしら 藤本 保生
- いち早く春を捕えて咲き犬のふぐり 隅山 瑞子
- 金色に椿の花芯開き月の客人宿りしか 吉川 聰
- 藍染めののれんが春の足音待っている 藤永 和子
- 一言のやさしい言葉春が来た 田村 節子
- 朧夜の夢やぶる猫の春 久光 時子
- 明るさ速くなり春を分け合う散歩 村田ミチエ
- ◆草の会 白魚を飲みかな 菜種梅雨魚 下がり 一輪車踊る 紺碧の海引る 採りたての ールかな 稚鮎の放たの村 人形の笑い 稚魚放ち湖 かめる 葉桜へ風の りけり 開け放ち春 かな 散り急ぐ雨 けり 近道を遠く しんぼ ふる里のよ 餅 飛花落花綺 放蕩す 川
- ◆萩川柳 題「笑う 雪道で転ん ひとり居の 大笑い 年頃になっ 一浪を突破 さい、皮首